

感覚環境のまちづくりシンポジウム（平成20年12月9日）

「五感に楽しいまちづくりを訪ねて」

作家・五感生活研究所代表 山下柚実氏

こんばんは、山下柚実と申します。よろしくお願ひいたします。

これまで、「感覚環境のまちづくり」という概念について基本的なところのお話があり、皆さん、その辺りはだんだん理解され始めたかなと思いますので、私は具体的なまちづくりの事例をお見せする中から、「五感や感覚に楽しい心地よいまちとはどういうものか」ということを一緒に考えてみたいと思っております。

「感覚環境のまちづくり」という概念自体が全く新しいものですから、これを掲げてまちづくりをやっている事例というのはまだない訳です。ただ、音、光、香りといった環境資源をテーマにしてまちづくりをしている事例からさまざまなヒントを読み取る、またこれからどう進めていったらいいのかということをおぼることができないのではないかと思います。

私自身は、全国様々なまちづくりの事例をおぼしながら、現在、事例集を作っているところです。

本日は皆様と、今、4つの事例から、「感覚に心地よいまちをどう作っていいのか」ということを一緒に感じながら考えてみたいと思っております。1つ目は岐阜県の郡上八幡です。水ということで非常に有名なまちづくりをしている事例です。それから2番目は大阪の平野区。音というものを使い、音風景と音博物館というものを展開している事例。3番目は、今度はぐんと北の自然の中に行きまして、北海道の富良野エリアで、かおり風景と、五感による環境教育を行っている事例。そして4番目には、滋賀県の彦根市のNPOの活動から考えるまちづくりという、この4事例を、写真をたくさん盛り込んでまいりましたので、一緒に旅をしているような気持ちで見えていただければと思っております。

まず1番目に、郡上八幡の事例をお紹介したいと思います。ちょうど岐阜県の中央の部分、正式には郡上市八幡町という場所です。長良川と吉田川という大きな川、そしてちょっと小さな小駄良川と、川がたくさんまちの中を流れているまちです。

郡上八幡は、人口が1万6千人しかいない小さなまちなんですけれども、ここに年

間 140 万人の人がやってくるという。

そのヒントは一体何かと言うと、「水を活かしたまちづくり」にあります。

写真の方が観光協会のまち歩きのツアーの案内人です。(写真1)

私は取材という形で、このツアーの中でまちめぐりを一緒にさせていただきましたので、まちの風景を写真で流しながら、皆さんも一緒に旅をしているようなつもりで見ていただきたいと思います。



写真1. まち歩きツアーの案内人



ここは古い城下町で、まちの中にたくさんの用水路が走っています。湧水も随所にあります。湧き水、川、用水路、井戸、もちろん上下水道はあるんですけども、まちの中にたくさんの様々な水が流れているというのが郡上八幡なんですね。古い城下町の個性的で美しい景観など古いものが残っております。

随所に、「旅人に聞かれ、自慢の水守る」といったフレーズが揚げられ、水が自分たちのまちづくりのアイデンティティであるということが見て取れるようなまちになっております。(写真2)

写真2. 旅人に聞かれ、自慢の水守る

用水が随所に流れておりますが、用水をせきとめて水をためてボリュームを出して、この場所で水を使って洗い物をしたり、野菜を洗ったりとかということを今でも生活の中でやっている。水とともに暮らす風景が郡上八幡の中にはたくさん見て取ることができます。(写真3)

「淀みなく流れる水に感謝して」などプレートにメッセージが書いてありますけれども、いかにまちの中に水に対する気持ちが満ちているかというのがよくわかります。



写真3. 用水をせき止める

これは珍しい事例ですが、長屋の真ん中に川が流れていて、ここで洗い物をするというので、この家とこの家の共同の台所のような空間として水の流れるが使われているということです。蛇口を開けば水が出てきますけれども、しかしそれ以外にも色々な水がある。(写真4)



写真4. 長屋の中を流れる川

この郡上八幡という場所は降水量が非常に多く、そして山が面積の9割ぐらい占めるということで、平地に水がたくさんわき出てくるような、そういう特性を持っている地形です。そのため、この郡上八幡の人々は、水を自分たちの生活の中に取り込んで使うということを何百年もの間やってきた訳です。

これは、「ポケットパーク」と言われる小さな公園です。親水型、水と触れ合うことができるスポットがたくさんまちの中にあります。

**(写真5)**

ちょっと腰かけてほっと一息ついて水の音を聴いたり、それから湧水ポイントでは水も飲む、それから水に触ることもできるといった場所が何と30カ所以上あるそうです。



写真5. 水と触れ合う「ポケットパーク」

また、これは「水舟」という独特の装置です。ここから湧水が出てきて、たまります。上段のスペースは、一番きれいな水をためて飲む、あるいは料理などに使う。その下の段は洗い物をする、また、その下のところでは、泥のついたものを洗うというような、2段、3段に水槽を重ねて、湧き出してくる水を上手に使う、そういうことが



写真6. 水舟で花を洗う人

日常の中でもまだ続いている。かつ、この「水舟」は地域の人達が一緒になって掃除や維持管理をしているという意味で、コミュニティの中でのポイントのような形で水が生きている。**(写真6)**

ちょうど菊の花を一番下の3槽目のところで洗って泥を落としていらっしゃる方がいらしたので写真を撮らせていただきましたけれども、こんな感じで「水舟」が活用されていました。

こちらは「宗祇水」、自然の湧き水なのですが、昭和60年の環境庁「名水100選」に選ばれました。室町時代の連歌の達人・宗祇がこの傍らに庵を結んだという歴史的意味の深い湧き水です。（写真7）



写真7. 宗祇水



写真8. やなか水のこみち

これは、ポケットパークの1つ「やなか水のこみち」。水と触れ合う空間も色々な種類のものがありまして、これは吉田川の中の石を使って川のイメージで小道を造り、その脇には水がまた流れているというものです。（写真8）

そのように、たくさんあって紹介し切れないのですが、水の風景がまちの中にたくさん現れているのが郡上八幡という場所でした。

郡上八幡で感じたことは、水と直接肌で触れ合う空間がまちの中に大変たくさんあって、感覚環境として非常に心地よい空間になっているということでした。水は、飲むという意味では味覚です

し、涼感という意味では肌で感じ水で遊ぶということ、ものを洗ったり、例えば染物などを水を使う仕事もある。水を介して人と人がつながるような空間にもなっている。また、郡上八幡という場所を歩くと、あちこちから水の音が聞こえてくる。

つまり、「水は五感の体験である」。そういう水のまちが郡上八幡という場所にあるわけです。ではこのまちで最初からそういうものができていたかと言うと、実はそうではないというお話を聞きました。

最初に、昭和 50 年代に調査に入った多摩美の環境デザイン学科の渡部教授という方が調査をして、「非常にすぐれた水環境を持っている、水システムのすばらしい場所だ」ということを言われたのですが、いくら文明的に価値があるよと地元の人に申し上げてもなかなか信じてもらえず、そのことが、水環境やすぐれたシステムを守ろうとすることへの障害にもなっていたそうです。

ところが、昭和 60 年の「名水 100 選」に先ほどの宗祇水が選ばれたということで、一躍、行政・住民が連帯して「水」を一つのまちづくりのテーマに据えたと、そういう変化があったということをお教えいただきました。

つまり、自分たちが住んでいる場所の感覚的な豊かさ、感覚的にすぐれた要素に気づくということは、なかなか難しい。がしかし、視点をしっかりと持てば、その価値がはっきりと見えてくる。そのきっかけが、この郡上八幡の場合は「名水 100 選」であった。以後は水ということをも一つの合意として、そこに向かってのまちづくりが進んできたということをお聞きしました。

ということで、郡上八幡というところから「感覚環境のまちづくり」の要素である涼感や水と接する五感体験を通したまちづくりを見ることができました。

次に、2つ目の大阪平野区の話に参ります。今度は大都会の中ですが、大阪市の下の方に平野区はあります。人口が 20 万人ほどいて、大阪市の中で一番人口が多いところですよ。

そもそも平野は、戦国時代には周りを壕で囲まれていて、非常に自治的な、町人が自分達で治めるような自立的な都市であったという歴史を持っています。江戸時代などは綿の産業で栄えた、非常に豊かな文化資産を持ってきた場所で、今、この平野というまちを、まちづくりとしてまとめていこうという試みで、「祭りちょうちんが似合うまちなみ」というキャッチフレーズの下、平野郷として景観等を整備しているところでした。

古い建物が空襲でも焼けずに残っている、そういう風情があるところですが、そういう意味で平野郷は、1つの独自の歴史を持っているエリアでもあります。（写真9）



写真9. 平野郷

今回皆さんにご紹介したいのは、その歴史の独自性というより、むしろ今行われているまちづくりの取組です。



写真10. 音の博物館

平野区では、非常にユニークな、「まち全体を博物館と見立ててまちづくりをしよう」という取組がなされてきており、個性を持った歴史的場所なり店、寺などを1つ1つの展示物のようにとらえ、巡ってもらおうというまちづくりなのですが、その中でも今回私がピックアップしたいのは「音」です。

平野の音というのを集めた、音の博物館というサテライトが幾つかまちの中に点在しています。ここでは、平野の固有の音が収録されており、こういった色々なイヤホンなどを使って聞くことができるポイントがあります。（写真10）

たとえば全興寺の境内、ここもコミュニティスペースとしてこの地域の中心になっておりますが、この中にも「平野音の博物館」のワンコーナーがあります。（写真 11）

この古い電話の受話器から、平野にしかない独特の音 100 種類が聴けるということで、例えばだんじりの音であるとか、その商店街の物を売ったり買ったりしているときの声であるとか、子供たちの遊び歌であるとか、この平野という場所で響いている音風景、先ほどお話があった、音とこの場所とがリンクして出てきているこの場所独特の音を収録しているというコーナーがありました。

また、首を入れると地獄の釜の音が聞こえるという場所もありましたし、かつてここを走っていた南海電車の音が聞こえるコーナーとか、地下には水琴窟の空間もありました。「音」というテーマをめぐっての体験がコンパクトにできる。

もう 1 つ、平野独特の音ということで、大念仏寺の中で大きな数珠を繰る行事があります。（写真 12）

これも平野の独特の音風景を作っているものの一つで、5,400 個の数珠がつながった巨大な数珠なんですけれども、お堂の中で何百人もと一緒に回す数珠繰りをします。ガタンゴトンというような独特な音が響き渡ります。それと皆さんのいろいろな念仏を唱える声などが響き合って、平野の独特の音風景をつくるのですが、そういった音などもこの平野音博物館には収録されていて、ボタンを押すとその音が聞こえてくるといったサテライト博物館が何カ所も平野のまちの中にある訳です。



写真 11. 全興寺のワンコーナー



写真 12. 大念仏寺の大数珠繰り

平野のまちづくりに取り組まれている全興寺の住職さんに、どういうことを一番大切にしていますかと聞きましたら、「私たちは目に見える形を見せる観光ではなくて、目に見えない「感風」というのを大切にしたまちづくりをしているんです」という答えが返ってきました。「感風」というのは、目には見えないけれどもまちに確かにあるもの、それは雰囲気であり、音とにおい、あるいは人とのつながり、その固有の歴史や文化、そういうものが漂わず、目に見えない、しかし確実にあるまちの要素、これらを大切にしてみちづくりをしている、ということをお話しされました。

まちづくりということで平野から学んだことは何かと聞かれば、わざわざまちづくりのために特別な音を用意したということではなくて、今ある暮らしの中から自分たちのまちづくりのテーマを「音」というところに据えて作ってみたのが平野の音博物館である。つまり、どのまちにでもこういう試みはできる、そういうことを教わった訳です。

次は、大自然の中に飛んでみたいと思います。

富良野という場所は北海道の中心にあつて、富良野市、その上にある中富良野町、上富良野町といった一帯を富良野のエリアととらえて事例として取材をしてきました。富良野と言うと結構有名で、倉本聰さんのドラマなどでたびたびロケの現場になって、1つのイメージというものができ上がっていると思います。

富良野を一言で言ったら、大体若い人は「ラベンダー」と答えてくれるでしょう。きつこの富良野のラベンダー畑は、富良野を代表する一つのイメージとして定着していると思いますけれども、環境省が行った「かおり風景100選」という、そのまち独特の香りが感じられる風景を全国から100選ぶ取り組みの1番目に出てくるのが富良野のラベンダー畑です。

富良野という場所は日本の中でラベンダーを育てるのに適した気候でこの大自然の雄大な風景とラベンダーの香りが独特のかおり風景となり人々の中にイメージとして定着しているという場所です。

富良野の中でもラベンダー畑で有名な富田ファームは今、年間100万人が足を運ぶという非常に有名な観光スポットになっております。(写真13)

こうした富良野の独特の自然環境や景観を土台にしながら、かつ今、感覚環境とも言っているような新しいツーリズムの可能性ということを一生懸命模索しており、色々な取組がされています。

1つは「フラワーツーリズム」ということで、「花」をテーマにしたツーリズムを、北海道は一生懸命推し進めております。富良野プリンスホテルに隣接するゴルフ場にも「フラワーゾーン」というゾーンがございまして、花畑の景観や花の香りを個性として打ち出して、そこに人を呼んだり滞在してもらおうということをしてしておりますが、さらにもう一歩踏み出して、2006年にNPO「C.C.C.富良野自然塾」が、五感を使った環境教育と植樹の活動をスタートさせています。

ここはかつて非常に有名なゴルフコースで、アーノルド・パーマーが日本で初めて設計した有名なゴルフ場だったのですが、西武グループの経済的な問題で閉鎖されました。そこをNPO法人が借り受け、五感を使った環境教育のフィールドにしているということです。

今回、私自身もプログラム体験してきました。これは何をしているかというと、目隠して裸足で歩いているんですね。私たちは情報を取る際に視覚に非常に頼っていて、情報収集の8割方が見ることによると言われていますけれども、あとの2割でしかにおいのかいんだり、音を聴いたりするということをしていない。ということで、逆に視覚を遮断して森の中を歩く「裸足の道」です。まずこの環境を感覚的に感じ取るということです。

(写真14)

自分の五感でその場所を体感して、環境問題の



写真13. ファーム富田



写真14. 「裸足の道」を体験

理解につなげていこうという取組です。

これは地球の模型ですが、地球自体も、例えばどういう構造になっていて、月とどれくらい離れていてといった模型をたくさん展示しながら、知識ではなく自分の体感を通して環境問題に迫っていくというプログラムを、このゴルフ場をフィールドにしながらやっているという風景です。

これは「地球の道」と言いまして、地球ができてから今までの長い足取りをこのコースに造りまして、460メートルをたどっていく中で46億年というときを感じようという壮大なフィールドワークです。 (写真 15)



写真 15. 地球の道



写真 16. ゴルフコースを森に返す

こうした体感を通して、五感を通して環境問題を感じ取った後に、いよいよゴルフ場に苗木を植えるという試みに入っていきます。

ゴルフコースに一本一本苗木を植えて、50年かけて15万本を植えて森に返すという活動です。 (写真 16)

塾長である倉本聡さんが「地球は子孫から借りているもの」と書いていますように、体感を通じた環境学習が富良野でされております。

富良野にしかない独特の風景、植生、空の色、花の香りといったものを観光資源としてしっかりと育んできた上で、ゴルフ場やスキー場などの大型レジャー施設中心の観光事業から、五感を活用した環境教育、環境ツーリズムへという転換を行っている姿がありました。そういう意味では、古い歴史や文化的遺産がない場所でも、「感覚環境のまちづくり」の視点からそこにある固有の自然環

境を活かしたまちづくりが可能ではないかということです。

最後に滋賀県彦根市の事例を紹介します。彦根はご存じのように彦根城があって、井伊直弼の城下町であり、現在もお城の城割りとその周りにできた城下町の町割りが残っている、歴史的な場所です。

先ほど山下充康先生から話があった「残したい日本の音風景 100 選」に「彦根城の時報鐘と虫の音」が選ばれており、玄宮園という大変立派な古いお庭で「虫の音を聞く会」という行事も開かれております。

彦根は既に景観という意味ではかなり整備をしてくれています。

これは、お城の前に通っている「キャッスルロード」で、この道幅を広げて歴史的な町並みを全部整備するという形で整えられ、たくさんの観光客を集めていて、町並みを整えるという意味では非常に早い段階で達成したというまちではあります。 (写真 17)



写真 17. キャッスルロード

テーマは「オールドニュータウン」ということで、古いものを活かしながらまちを新しく生まれ変わらせ、ハードウェアの整備は既に完成したということだと思えます。

しかし、ハードウェアを造っただけでそこに魂を入れなければ、つまり、そのまちをどう感じて楽しむかというソフトウェアがなければ、まちは本当に生き生きとはしてまいりません。さらにまちづくりを充実させるための取組として、産・学・行が手を組んでNPO五環生活の活動が始まっています。

滋賀県立大学の近藤隆二郎准教授が代表理事となり、学生さんも中心に色々な五環生活の活動がされております。「五環」というのは、五感と環境を組み合わせ、かつ生活をつなげてまちづくりをしようということです。

1つ象徴的な活動が「ペロタクシー」です。これは自転車でまちをめぐる訳ですが、スローなテンポでさきほどのキャッスルロードを味わってみると、また違う景観が見えてきます。(写真18)



写真18. ペロタクシー

また、それ以外にも様々なエコツアーもされていますし、五感を

使ったワークショップで五感を使って地図化をするなど、身体を使いつつ、立案しつつ、また行動しつつチェックするというような、そういうリンクということを提示されています。

「まっくらカフェ」というのは、カフェの中を真っ暗にして、そこで物を食べたり飲んだりしてみようという試みです。NPO 五環生活のコンセプトは、「まちづくりは身体参加である」、つまり知識や頭の中の世界で考えるのではなく、体験、一緒に行動するというような身体参加を通してまちづくりを考えてみようということであり、このことが今、非常に大切になっているのではないかと近藤先生は言っておられます。

その活動の1つとして、まちを赤く彩る「百彩」というユニークなイベントも実施されておりました。井伊直弼は、赤備えということで赤い色をまとって戦に行ったそうですけれども、そういう遺伝子が残っている中山道の宿場町をもう一度赤く染めるということで、まちの連帯感を感じるまちづくりも企画されておりました。(写真19)



写真19. まちを赤く彩るイベント「百彩」

彦根から学んだことは、「ハードウェア中心の町並み景観整備だけではまちづくりは完結しない」、「五感や感覚を使ってまちを楽しむソフトウェアを発見することが非常に重要だ」ということです。特に今の時代、花木先生のお話にあったように、そういう局面に入ってきていると思います。

それから、もう1つ、都市計画というと、上から俯瞰する鳥の目による都市計画がこれまでは一般的でしたが、そういう姿勢を転換して、自分たちの身体感覚から、ベースから積み上げていくボトムアップの形で都市を考えること、そして、それぞれの感覚的体験をパッチワーク的につなげていくという形で、上から見おろすのとは違ったベクトルでのまちづくりというものをやってみようという提案だったと思います。

4つの事例から見えてきたことをまとめますと、まず郡上八幡からは、「自分たちが暮らすまちの魅力を発見するということが大切だ」ということを非常に強く感じました。つまり、水というのは彼らにとって当たり前にあった、しかし、それがかけがえのない感覚的な資源であるということをもう一度再確認したところから、新たなまちづくりが出発したということです。

2つ目の平野の取り組みは「日常的な暮らしの中にまちづくりのテーマは見つかる」ということを教えてくれています。耳を澄ませばそのまちらしい音は必ず発見できるということ。目には見えなくても、そのまちにある音、におい、光、風といった要素を大切にすることがまちづくりの根幹でありスタート地点なのだという地元の人の言葉が印象的でした。

それから、北海道富良野は「自然環境を活用した新しいまちづくりへの転換」ということだと思います。ゴルフ場や大きなスキー場という施設型の観光から、その場所に既にある環境資源を五感を使って発見して、それをまちづくりにつなげていこうという試みでした。

4つ目の彦根は「まちを楽しむために新しいソフトウェアを産・学・行で創造していく」ということです。既に箱物はできているが、その中に入れる魂、ソフトウェアを、感覚を使って作っていこうという提案だと思います。

4つの事例の共通点としては、「五感・感覚を働かせることで、まちづくりの可能性というのが開けていった」ということではないかと感じました。

実はまだ、事例集作成のための取材も続いております。光を使ったまちづくりの事

例、京都の町家からこぼれる光でまちをつくっていこうという学生さんたち中心のまちづくりの事例を取材してこようと思っております。

上記のような現場のレポートを収録する事例集は、来年の2月から3月に花木先生が座長を務められる検討会でまとめあげ、「グッドプラクティス」として、これから「感覚環境のまちづくり」に取り組んでいく際に参考にしていただきたいと思います。ありがとうございます。